

日本保健物理学会第 58 回研究発表会への参加の印象記

三輪 一爾
Miwa Kazuji

1. はじめに

日本保健物理学会第 58 回研究発表会が 2025 年 12 月 18 日(木)～20 日(土)にかけて茨城県の水戸市民会館にて開催された。大会長は日本原子力研究開発機構(JAEA)の橋本周氏が務められた。ちなみに、筆者は開催地水戸の高校出身であり、前々職は大会長と同じ JAEA である。また、本稿を依頼いただいた日本アイソトープ協会に 2025 年 7 月まで所属していた。前記のことから何かと縁がある会と感じており、そういった観点も含めて印象記を執筆する。

2. 発表について

発表は 3 つの会場にて行われ、特別講演 1 件、企画セッション 5 件、一般口頭発表 69 件、ポスター発表 51 件と多くの演題が発表された。企画セッションのうち、2 件は日本、韓国、中国(発表動画の上映)の専門家が参加した国際連携プログラムであった(図 1)。

本報では、特に印象に残った 2 件の国際連携プログラムについて概説する。講演情報を以下に示す。

1. Plenary Session for CKJ Collaboration Program 講演者: Liye Liu (CSR/P/CIRP), Lee Hee-Seock (KARP), 藤田博喜 (JAEA)
2. International Special Session “The LNT Model- Challenges and Future Perspectives” 講演者: Min Baek (POSTECH), Ji-Young Kim (RHI/KHNP), Eunok Han (NEPC/SNU), Qiang Liu (IRM-CAMS), Yue Ren (CIRP), 西田一隆 (日本エヌ・ユー・エス), 浜田信行 (電力中央研究所)

Plenary Session では、日本、韓国、中国の学会の活動状況について発表された。Korean Association



図 1 国際色豊かな国際連携プログラムの様子

for Radiation Protection (KARP) では、多様な人材の活躍の場を作り出すために Young Scientist Group (YSG) や Korea Woman in Radiation (K-WiR) 等の活動にも力を入れていることが印象的だった。日本保健物理学会に所属する若手として引き続き連携していきたいと感じた。中国は残念ながら諸事情により映像での参加となった。

International Special Session では、現在の放射線防護の分野で広く適用されている LNT モデルについて各国の専門家が主に疫学的な観点と社会への影響の観点から講演を行った。LNT モデルは疫学的に人体への影響が確認できない低線量域においても線量に比例してリスクが存在すると仮定する保守的なモデルであり、筆者はこのモデルはリスクを嫌う傾向が強い日本において受け入れられやすいモデルであると認識している。しかし、各国の専門家の講演と総合討論を通して、国によって(そして研究者によって) LNT モデルに基づいた防護の考え方に対する態度は大きく異なることを実感した。



図2 教育関連の展示が充実した日本アイソトープ協会のブース

一般講演では9つの区分（放射線計測，現場の放射線管理，放射線教育，環境放射能，防災・緊急時対応，IF事故関連，線量評価，放射線影響，防護理論）のセッションにおいて口頭発表が実施された。

特に印象に残った講演は「放射線教育」のセッションにおける「科学の基盤となる保健物理の役割と期待—国際原子力科学オリンピック（INSO）を例に一」の4件のシリーズ発表である。INSO（International Nuclear Science Olympiad）は，アジア太平洋地域の20歳未満の学生を対象としており，IAEAの原子力科学技術分野の人材育成の取組みの一環として行われている。日本においては，委員長である飯本武志氏（東京大学）を中心に，日本アイソトープ協会を含む放射線防護に関連する個人・団体により日本代表選手団出場支援委員会を構成し，2025年夏に開催された第2回大会への日本チーム（選手4名，専門家2名）の出場を支援した。結果として，金メダル1個，銀メダル2個，銅メダル1個に加え，実験試験最高得点賞，最優秀女性選手賞の2つの特別賞を獲得するすばらしい成績を残した。4名の講演者からは，出場支援委員会の戦略や苦勞，この成果の先に見せる原子力科学技術分野の未来について語られた。本講演を聴き，教育にかかわる者の端くれとして心が熱くなるものがあった。



図3 世界中から参加したゲストと共に鏡開きをする様子

3. 機器展示について

11の企業・団体による機器展示が行われていた。個人的な視点で恐縮だが，日本アイソトープ協会のブースにおける放射線教育の展示が大変充実しており（図2），引き続き保健物理学会と力を合わせて次世代の育成に取り組んでいけたらよいと思った。

4. 懇親会について

水戸の銘酒「一品」の鏡開き（図3）から始まり，「水戸の梅大使」と水戸市マスコットキャラクター「みとちゃん」の登場，茨城名物あんこうの吊るし切りのパフォーマンスまで行われ，開催地の色が強く出た懇親会だった。

5. おわりに

本会は2011年の震災直後に開催された第44回以来の水戸での開催であった。海外のゲストを招いたセッションあり，開催地にちなんだ出し物ありの，国際性と地域性のバランスがよい会だと感じた。会場も震災により被災した後新たに建造された水戸市民会館であり，震災を乗り越えた茨城の姿を世界中からの参加者に示すことができた会であった。次回には2026年12月8～12日に弘前で開催予定である。

（名古屋大学 安全科学教育研究センター）